

別科におけるOPIを生かした会話指導について

国際交流センター

花田 敦子

筆者は大学で学ぶ留学生に接してきたが、「日本語能力試験1級」に合格しているものの、簡単な会話もうまくできず、作文でも漢語を多用するばかりで意図が伝わらない学生を多く見てきた。彼らは「運用力」を育てる指導を残念ながら受ける機会がなかったからだと思われる。そこで別科設立の際の指導目標は「運用力を育てる」ことを中心にした。

本学別科は1年もしくは1年半の期間で「大学に必要な日本語力を養成する」機関であるが、勿論「大学に必要な日本語力」は文法力だけではなく、大学内外で相手と良好な人間関係を維持しながらコミュニケーションを図る能力と、大学の講義を理解し、ゼミ発表などができる専門レベルの運用力である。そのために別科では「総合」「漢字読解」「作文」などの時間を設定しているが、ここでは特に「会話力養成」について述べたい。

一方、「会話力」の定義やレベル判定法、指導法については、日本語教育界では共通のものさしが存在しているとはいえないのが現状である。そこで別科では2001年度からACTFL(*1)のOral Proficiency Interview(以下OPI)の考え方を会話指導に生かしてきた。その理由は「運用力」を軸にした判断基準が会話力をどう育成するかを視点を明確に与えてくれるからである。

以下にOPIの判定基準を概説し、2001年度から2006年度の会話力養成の実践報告をしたい。

1. OPI 判定基準について

ACTFL は英語・スペイン語を始め、10ヶ国語以上の言語において「OPI」といわれる決められた型のインタビューをすることで、その言語における被験者の会話能力を判定する。(インタビューは ACTFL の講座を受講し、資格審査を経て認定されたテスターしか行うことができない。) OPI はその言語に関する「知識」を問うものでなく、30分間のインタビューの間に行われたパフォーマンスで「何ができたか」という「運用力」を問うものである点が重要である。インタビューではさまざまな話題でその場に応じた質問が投げかけられ、被験者は精一杯能力を駆使してそれに答えようとする。またロールプレイも課せられ、架空の状況設定で被験者の会話能力が試される。

ACTFL の尺度はまず主要レベルでは初級から中級、上級、超級の4段階に分けられ、さらに初級から上級までは「上・中・下」の3つの下位レベルに細分され、全部で10段階に区分される。下位区分の「上」は主要レベルの上の段階のタスクがほとんどできる状態を示す。すなわち「中-上」はほとんど「上級」レベルのタスクを行えることを示している。(表1)

表1 「OPI のレベル判定区分」

主要区分	初級			中級			上級			超級
下位区分	下	中	上	下	中	上	下	中	上	
内 容			中級のタスクがほぼできる	中級タスクがやっと維持		上級タスクがほぼできる	上級タスクがやっと維持		超級タスクがほぼできる	

判定の基準になる要素は4つ、「総合タスクと機能」「場面・話題」「正確さ」「テキストの型」である。このうち最も重要視されるのが「総合タスク・機能」である。基準は1999年に改定され、現在「日本語 OPI」ではこの基準を採用している。(表2 参照)

表2 「判定基準 — 話技能」 (*2)

	初級	中級	上級	超級
総合タスクと機能	丸暗記した型どおりの表現、単語の羅列、句を作って、最小限のコミュニケーションをする。	自分なりの文を作ることができ、簡単な質問をしたり、相手の質問に答えたりすることによって、簡単な会話なら自分で始め、自分で終わらせることができる。	主な時制の枠組みの中で叙述したり、描写したりすることができ、予期していなかった複雑な状況に効果的に対応できる。	いろいろな話題について広範囲に議論したり、意見を裏付けたり、仮説を立てたり、言語的に不慣れな状況にも対応したりすることができる。
場面・話題	最もありふれた、インフォーマルな場面・日常生活における、最もありふれた事柄	いくつかのインフォーマルな場面と、事務的・業務的な場面の一部、日常的な活動に関する予想可能で、かつ身近な話題	ほとんどのインフォーマルな場面といくつかのフォーマルな場面・個人的・一般的な興味に関する話題	ほとんどのフォーマル・インフォーマルな場面・広範囲にわたる一般的興味に関する話題、およびいくつかの特別な関心事や専門領域に関する話題
正確さ	母語話者でない人との会話に慣れている聞き手でさえ理解するのが困難である。	母語話者でない人との会話に慣れている聞き手には何度か繰り返すことによって理解してもらえる。	母語話者でない人との会話に不慣れた聞き手でも、困難なく理解できる。	基本的言語構造に関してはパターン化した間違いがない。誤りがあっても、実質的にはコミュニケーションに支障をきたしたり、母語話者を混乱させたりすることはない。
テキストの型	単語と句	文	段落	複段落

2. 別科における実践について

2.1. 目標設定

別科の最終目標は「大学生活で困らない日本語力の養成」であり、「会話」に関して言えば前述のとおり「周囲の人々とコミュニケーションをうまくとり、大学での専門的・学際的话题で議論したり発表したりすることができる」ということになる。これは上記の基準から言うと「上級」以上を目標にする。

では1年もしくは1年半の短期間でどのように上級まで向上させるかということが問題となる。そこで各学期の目標を半期ごとに設定した。半期は15週で510時間の日本語学習が行われ、会話は90時間。ただし初級は120時間学

表3 「各クラス別会話力到達目標」

クラスレベル (テキスト)	目 標	
	OPIの レベル	具体的運用力
初級クラス 『SFJ』*3 (最初の半年)	中級一 中以上	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的なあいさつや決まり文句、あいづちを自然に使うことができる。 ・終始一貫して自発的な文で話すことができる。 ・質問をしたり、相手の質問に答えたりして簡単な会話を自分で始め、自分で終わらせることができる。 ・日常的な話題や身近な話題、いくつかの一般的话题について説明したりでき、日本での生活で基本的なコミュニケーションが何とかこなせ、サバイバルできる。 ・表現できない部分があっても相手に質問したり、聞き返したりして会話をつなげていこうとする積極性を持つ。
中級クラス (自主教材) (入学1年後)	上級一 下以上	<ul style="list-style-type: none"> ・終始一貫して段落で話すことができる。 ・個人的・一般的な興味に関する話題、社会的な話題で言いたいことを相手に理解してもらうことができる。 ・詳しい説明・描写、根拠のある意見を述べることができる。 ・表現できない部分は他の言葉で言い換えたりして話をつなげていくことができる。 ・日本の習慣に従った談話構成、基本的な敬語が使える。
中上級クラス (自主教材～生教材) (入学後1年半)	上級一 中以上	<ul style="list-style-type: none"> ・複文や接続詞を的確に使用し、終始結束性のある段落で話すことができ、多くの話題で複段落で話せる。 ・複雑で予期しない状況でも効果的に対応できる。 ・個人的でない一般的な話題でも描写や根拠のある意見叙述、反論ができる。 ・ほとんどの話題で洗練された語彙で簡潔に論点を叙述することができる。 ・場面、内容、相手に応じた適切な文体(敬語)を使い、相手に不快感を与えずにコミュニケーションをとることができる。

ぶ。以下に半期ごとの目標を掲げる。(表3参照)(表3のクラスレベルとOPIレベルは名称が異なるので注意)

次に各レベルでの具体的指導内容を報告する。

2.2. 教材と指導内容

2.2.1. 「初めの半期」の指導(第1期)

この時期はとにかく日本での生活をスムーズに行わなくてはいけないので、基本的な挨拶などの表現と文化的な知識などを織り交ぜ、「サバイバル」の力(OPIの「中級一中」以上)を養成することを目標とする。

テキストは『SFJ』(*3)を使用。同テキストはコミュニケーションストラテジーについて多くの記述がなされ、会話練習にもストラテジー習得が意図的に盛り込まれている。語彙や表現が乏しいこの時期では、生活するため何とか意思を伝達し、相手の意図を汲み取る技術が必要である。場面に与えられた情報—場所、身近な物、表情、声の調子、ジェスチャーなどを総動員し、類推力を働かせてコミュニケーションを図る必要がある。『SFJ』に盛り込まれたストラテジー項目は多岐にわたるが、簡単に表に示すと次のようになる。授業時間の制約上、いくつか選んで実施している(*印)。(表4)

(*4) 表4 「SFJ」のコミュニケーションストラテジー項目一覧

課	項 目	実施*
1	・会話の始め方 ・あいさつ ・自己紹介のしかた ・別れるときのあいさつ	*
2	・道で出会ったときのあいさつ ・簡単な受け答え	*
3	・買いたいときの切り出し方 ・注文 ・受け渡しのあいさつ	*
4	・通りすがりの人を呼び止める ・道を聞く ・聞き返す ・確認 ・即答できないときの応対 ・お礼～受け方	*
5	・話題の提示 ・切り出し方 ・わからない言葉を聞く ・確認 ・答えられないときの応答 ・談話構成	*
6	・尋ねるときの切り出し方 ・間違いの訂正 ・婉曲的な事情説明 ・使い方・やり方を聞く	*
7	・電話番号の聞き方 ・電話の受け答え ・間違い電話 ・丁寧に聞く(切り出し方) ・確認	*
8	・許可求めの談話構成 ・謝り ・事情説明	*
まとめ 2	・短い返答* ・あいづち* ・「じゃ」の用法 ・「ちょっと」* ・「ね」「よ」「か」* ・「かな」「な」	
9	・(病状の)説明 ・助言を求める	
10	・店員の敬語表現 ・助言を求める ・婉曲的な断り* ・商品を求める* ・商品の特徴を言う	*
11	・(本の)注文	
12	・道の聞き方* ・教え方* ・確認* ・あいづち*	*
まとめ 3	・相手の発話 ・態度を肯定する* ・否定する* ・「そう」* ・あいづち*	
13	・初対面の人との談話構成 ・謝る ・伝聞情報の確認 ・申し出る ・申し出を受ける	*
14	・問い合わせの電話の談話構成 ・情報の確認 ・電話のあいづち ・気持ちの表現	*

課	項 目	実施*
15	・久しぶりの挨拶 ・近況を尋ねる ・品物についての情報を求める	
16	・提案 ・タクシーでの指示 ・道順	*
まとめ 4	・会話の切り出しかた ・感謝の表現	*
17	・誘いの談話構成 ・承諾、断りの表現 ・会話の終結	*
18	・目上の人への電話のあいさつ、談話構成 ・伝言の頼み方 ・伝言の伝え方	*
19	訪問の挨拶 ・マナー ・お土産を渡す、申し出を断る、話を切り上げるなどの表現	*
20	・会話のきっかけを作る ・友人への依頼 ・手順表現	*
まとめ 5	・否定形の表現 ・意見の言い方 ・敬語まとめ ・カジュアルな文末表現	*
21	・苦情の言い方 ・怒りを表す ・謝る ・言い訳	*
22	・お見舞いの挨拶 ・伝聞情報の確認 ・間違いの訂正 ・慰める ・別れの挨拶	
23	・依頼の談話構成 ・依頼表現 ・丁寧な断り ・会話の終結	*
24	・提案のしかた ・理由の言い方 ・賛同、反対の言い方 ・明確な判断を避ける表現	*
まとめ 6	・男性語、女性語（終助詞、文末表現） ・意見述べの言い方	*

また、SFJを使った会話およびストラテジー練習とは別に、学期の最後に「スピーチ大会」を計画し、「方法説明スピーチ」(*5)を行っている。これは次のOPI上級タスクにつながるものだが、人前でまとめた内容を長く「語る」経験をすることで「他人に理解してもらえる話しかた」の訓練を目的としたものである。「方法説明」と限定した理由は、この時期「情報説明」をするにはまだ語彙力が不足していること、表現力がない段階で情報説明をさせると、引用したものを棒読みするという会話力養成には役立たない結果となる恐れがあるからである。しかし、「方法説明」も細かい手順や描写が要求され、正確に記憶して話すことが要求されるため、2006年度の初級クラスでは「紹介スピーチ」に変更している。

また、発音についてはOPIマニュアルでは「中級」は「外国人の発音に慣れている人には理解できる」とある。この時期に、誤解を生じやすい発音

上の問題点はできるだけ直し、「普通の母語話者にも理解できる」(OPI 上級)発音を目指すように指導する。

2.2.2. 「2期目」の指導

半年たった時点で日本でのサバイバル力はおおむねついたと判断し、次はOPI「上級」を目指して「描写力」「叙述力」に加えて「段落で話す」と「より複雑な状況でのコミュニケーション力」を養成することを主眼に指導する。指導の内訳は二つに大別される。一つは「描写力」をつけるための「スピーチ指導」である。「スピーチ」といってもクラスで1分から2分の時間で自分の考えたことや興味のある話題について「段落で話す」訓練である。原稿を下書きし、教師がチェック後発表する。クラスの学生たちに内容がうまく伝わったかを確認し、次のステップへの材料にし、学期を通して繰り返し行う。内容は身近なことから次第に抽象的社会的な話題に移行するように指導する。文法や語彙学習が進むにつれて一般的な話題でも話せるようになってくる。

次に会話である。会話は学習者の現状に合うテキストがなかなかないため、手作りの教材を使用している(花田・権藤2005)。『SFJ』で一度やってはいても、具体的場面でまだまだ使いこなせないため、再度「相手」「状況」「内容」を具体的に提示し、身近に想定される場面で確実に運用できるように練習する。練習方法はモデル会話を暗記する方法はとらず、「タスク先行型」で行う。実際の場面を想定してすぐさま会話をさせ、自分の表現の不足部分を意識させるほうが学習者の「気づき」がはっきりしているからである。場面は「大学」での先生への「依頼」「許可願ひ」、事務との「相談」「依頼」、友人との「世間話」「依頼」「許可願ひ」「誘ひ」「断り」、「アルバイト先」で想定される店長への「許可願ひ」「仕事の相談」「あいさつ」、同僚や先輩への「相談」「依頼」などである。

また、この時期に再度練習する項目に「受け」の練習がある。会話とは一方的な主張だけであればいいわけではなく、相手とのキャッチボールができなければ、会話そのものがちぐはぐになり、相手との良好な人間関係が損なわれる。「いいよども」や「文末表現」に盛られた相手の心理を理解しながら、それを「受け」て、会話を進める練習である。具体的には「あいづち」

「くりかえし」「賛同のことば」「確認」など簡単な応答練習である。時間的制約もあるが、場面・機能に応じた項目を選んで指導を行っている。

この時期、別科では漢字の時間に『Intermediate Kanji Book I』を学習する。そこで身についた語彙力が総合テキストの語彙や文法学習とあいまって目覚しく伸びる次期でもある。その語彙力が運用と結びついた学習者は身近な話題から一般的话题へと話題の幅を広げ、「上級」への飛躍を遂げることができる。しかし、「運用」の意識がない学習者、あるいは一般的话题に興味を示さない学習者や、描写力がつかない学習者は「中級」から脱することが困難である。

また、余裕があれば前述の「スピーチ大会」を行い、この時期は「情報説明」を試みる。これは興味のあるテーマに関してさまざまな情報を集め、わかりやすく紹介するものである。写真やグラフ、図表などを駆使し、わかるように話す訓練をする。特に漢字音は正確に発音しないと理解されないため、漢字クラスにおけるディクテーションや発音練習をして意識化を図っている。

上記のように、「描写力」は文法力と語彙力に支えられており、また、「段落」のある話はスピーチ練習や作文練習などによって養われるものであると考える。

2.2.3. 「3期目以降」の指導

「3期目」というのは、1年半コースの最後の半期の指導を指す。

3期目は「上級一下」から「上級一中」以上へ伸ばすことを目標とする。そのためには「超級」レベルのタスクがいくつか遂行できなければならない。「超級」の条件として「一般的な話題に関して根拠のある意見を述べることができる」という項目がある。引き続き、2分スピーチなどを行うとともに、ディスカッションやディベートを経験させ、根拠のある意見を述べられるように指導する。これは作文指導でも意見文を練習させるので、それとあわせて発表の機会を与える。「超級」では意見を言った後でさらに反論への反駁ができなければならない。そのためには問題を複眼的に見る目が備わっていなければならない。会話運用だけでは賄いきれない総合的な論理的思考力が要求される。実際には「上級一上」にいたる学習者はごくわずかであるが、で

きるだけ近づける努力を行う必要はある。

また、「フォーマルとインフォーマルの両方で会話をスムーズに行う力」すなわち適切な「待遇表現」が上級以上では求められる。また、OPIでは「文化的要素」は判定に組み込まれていないが、日本においては人間関係維持のためには文化的な要素も無視はできない。状況に応じた「談話構成」や人間関係への配慮が必要となり、場面を選び、不快感を与えない話し方の練習も行う。ただ、友人同士のカジュアル表現は時間の制約でなかなかできないのが実情である。

以上、指導内容について詳述したが、2001年度から現在に至る別科学習者の会話力の実際を次に紹介したい。

3. 会話力判定結果

3.1. 初級開始学生の1年の記録

会話力判定はOPI テスター資格者数名で入学から半年ごとに行っているが、ここでは2001～2006年入学者の1年間の記録を紹介する。*印は初級から中級、中級から上級のように主要レベルを超えたもの、数値は「中一下」から「中一中」では「1」、下がった場合は「-1」のように上達度を表す。主要レベルを超えることは大きな飛躍を意味する。

表5～表8は来日して半年の学習後の判定とさらに半年後の判定を記す。

表5～表8でわかることは、別科入学後1年間で初級レベル学習者は25人中24名(96%)が半年後に「中級」すなわち、サバイバルレベルはクリアできる段階に伸びていることがわかる。さらに、来日から1年後で25%の学生が「上級」、すなわち一般的话题に対しても詳しい説明が可能で、長い一人語りができる域に達している。しかし、残る75%の学生は上級までにはさらなる学習期間が必要となるようだ。

なお、上達がマイナスや「0」のケースも見られるのは、OPI判定はそのときのパフォーマンスで決まるので、帰国直後だったりするとパフォーマンスが悪くなったり、会話に関心のない学習者はかえって下がるケースもある。また、OPI判定は先に見たように厳密に数値化されるものではないので、下位レベルはテスターによってずれが見られる点も付記しておく。

表5 「2001年9月生 初級レベル学生の伸び」

*印は主要レベルを超えたもの、数値は下位レベルの上達段階数

学生	2002.1	2002.7	伸び
A1	中-下	中-上	2
B1	中-上	上-中	*3
C1	中-下	中-上	2
D1	中-上	中-中	-1
E1	中-上	上-下	*2
F1	中-下	中-中	1

表6 「2002年4月生 初級レベル学生の伸び」

学生	2002.7	2003.1	伸び
G1	中-下	中-中	1
H1	中-中	中-上	1
I1	中-中	中-中	0
J1	中-上	中-上	0
K1	中-上	中-上	0

表7 「2004年4月生 初級レベル学生の伸び」

学生	2004.7	2005.1	伸び
L1	中-中	中-上	1
M1	中-下	上-下	*3
N1	中-上	上-下	*1
O1	中-下	中-上	2
P1	中-中	中-上	1
Q1	中-中	上-下	*2

表8 「2005年度4月生 初級レベル学生の伸び」

学生	2005.7	2006.1	伸び
R1	中-中	中-上	1
S1	中-下	中-中	1
T1	中-上	中-上	0
U1	中-下	中-中	1
V1	初-上	中-中	*2
W1	中-下	中-上	2
X1	中-下	中-上	2
Y1	中-中	中-上	1

3.2. 来日直後から半年の記録

表9は来日直後の判定と半年後の判定を記す。

表9 「2006年度4月生 初級レベル学生の入学当初と半年後の伸び」

	来日時	2006.8	伸び
A2	初-上	中-下	*1
B2	初-上	中-中	*2
C2	中-下	中-下	0
D2	中-上	上-下	*1
E2	初-上	中-上	*3
F2	初-中	中-下	*2
G2	初-中	中-下	*1
H2	初-上	中-中	*2
I2	初-上	中-上	*3
J2	初-中	中-下	*2
K2	初-中	中-中	*3
L2	初-上	初-上	0
M2	初-中	中-下	*2

データ（表9）によると、来日直後は聴解に不慣れなこと、別科合格後学習が滞っていることなどから、ほとんどの学生が初級レベル、すなわち「単語レベル」であるが、4ヶ月の学習を経て、ほぼ全員が中級に達していることがわかる。

3.3. 大学進学時のレベル

次に大学進学時（別科修了時）にどのくらいのレベルに達しているのだろうか。

表10 「別科修了（大学進学）時、上級の学生数と割合」

修了年度	別科在籍期間と人数			人数 計	上級者	割合
	1年	1年半	2年(*6)			
2002年3月	7	15	6	28	23	82%
2005年3月	18	9	2	29	22	76%
2006年3月	12	2	0	14	4	29%

(*7)

1年半以上別科で学習した学生は8割以上が「上級」に達している。(表10参照)

ただし、2003年と2005年では80%近くが上級に達しているのに、2006年が極端に低いのは、2006年修了者は2005年入学し、1年しか在籍できなかったため(*6)である。1年間では「上級」達成はなかなか困難であることを示している。しかし、上級に近い「中一上」を加えると、2005年では93%、厳しい条件の2006年度でも71%となり、学部で必要となる日本語力の基礎はできたと見てよいだろう。

3.4. 「別科入学時のレベル・学習期間」と「修了時のレベル」の関係

次に、別科での学習期間、入学時のレベルと会話力の伸びの関係を概観してみる。

表11は上級者の年度ごとの数と来日時の日本語レベルを分析したものである。日本語レベルは半年ごとのプレースメントテスト(文法・聴解・漢字語彙・読解)による。これを見ると、来日時のレベルが低くても2年学習すれば80%が上級に達し、1年半でも43%が上級に至ることがわかる。しかし、1年間ではわずか17%で少なく、1年間在籍で上級になった学生の83%は来日時のレベルが中級以上の学生であることがわかる。しかし、「中一上」まで含めると1年間在籍者が38%になり、3分の一は大学生生活の基礎力はずいぶんと判断できよう。来日時に中級であれば、1年で上級に達することは容易で、初級スタートの場合はやはり1年半の期間が理想的条件だといえる。

なお、初級スタート1年在籍の学生で1年を通して日本人学生との会話交流サークルに参加した学生は表11の中で3名いるが、そのうち2名が上級に達し、1名は「中一上」に達している点も、コミュニケーションの頻度と

表11 「2002, 2005, 2006年3月修了者(総数)における上級者の割合」

別科学習期間	調査学生数	上級者	%	中級開始者数(%)	初級開始者数(%)
2年	8	5	63%	1 (20%)	4 (80%)
1年半	26	23	88%	13 (57%)	10 (43%)
1年	37	18	49%	15 (83%)	3 (17%)

動機が会話力の向上の要因の一つである可能性を示唆しているといえる。

4. 分析と考察

このように別科では「大学で必要な日本語力」を目標にしつつ、OPIを軸にした「会話力」養成を目標として指導を行ってきたが、上記の結果からわかることをまとめたい。

まず、初級スタートの場合、4ヶ月ではほぼ全員が「中級」のサバイバルレベルに達すること。これは本学別科生が3級文法既習者であること、また、使用テキスト「SFJ」において前述したようなさまざまなストラテジー指導を行っていることが要因として考えられる。そして次の半年は今回の調査(表5～8)では25名中5名(25%)が上級に達し、13名(52%)が「中一上」とかなり話せるレベルに到達し、上級と併せると77%となっている。このことから、約10ヵ月後には一般的话题で自分なりの考えや説明ができること、複雑な状況でもなんとかコミュニケーションが可能になっていることがいえるだろう。「中一上」は前述のとおり、一般的な話題をほとんどよどみなく段落で話せるレベルである。完全にそれを維持できないために上級にはなれないが、大学入学後も語彙を増やし、接続表現などに習熟することによって上達の可能性があると思える。

また、別科で初級から学習を始めた学習者も最低1年半あれば、かなりの割合で上級に達することがわかった。1年で学部レベルまで到達するのはなかなか困難であるが、日本人学生との継続的なコミュニケーションなどによって上達の見込みはあると言える。

5. 今後の課題

以上のような取り組みを6年間続けてきたが、学部進学後の別科生の評価は運用力という点から概して高い評価を得ている。ちなみに学内で毎年行われている日本語弁論大会は一般学部生・院生・別科生とすべての留学生が参加するが、別科生および別科出身者の受賞の割合は以下のようなものである。ほとんどの年で受賞者5名中半数以上が別科生・別科出身者が占めていることがわかる。運用力養成の成果の一つであると判断できるだろう。

年度	参加者数	別科・別科出身 の参加者数	別科出身の受賞 者数〔5人中〕	別科参加者中 受賞の割合	受賞者中の 別科生割合
2002年度	12	4	3	75%	60%
2003年度	11	5	2	40%	40%
2004年度	12	6	3	50%	60%
2005年度	14	9	5	56%	100%
2006年度	9	5	3	60%	60%

現在の問題点は1年コースの学生に関しては、来日後わずか7ヶ月で「日本留学試験」、さらに10ヵ月後に1～2級レベルの学内テスト(*10)を受験しなければならないことだ。そのため、十分な会話練習の時間が取れず、いわゆる「受験対策」をやらざるを得ないのが実情である。しかし、短い期間中にも「スピーチ大会」「ビジターセッション」を始め、機能的側面からの会話練習、人間関係の視点(*9)からの会話練習などをできる限り盛り込むことは必要であり、今後の課題である。

注)

1. American Council on the Teaching of Foreign Languages
2. 『ACTFL-OPI マニュアル 1999年改訂版』より
3. 『Situational Functional Japanese』凡人社
4. 西頭・疋田(1999) 参照
5. 『日本語 口頭発表と討論の技術』(東海大学出版)による。
何かの方法を説明するスピーチ。
6. 別科では2001年度から2003年度までは日本語力の不十分な学生に対し、1年間の在籍延長を申請してきたため、2年在籍の学生もいる。
7. 2004年度はデータ不ぞろいのため割愛した。
8. 入国管理局の対応が変化し、2004年入学者から1年の在籍延長が不可能になった。
9. 権藤・花田(2005) 参照
10. 別科独自の修了試験(筆記回答形式)

参考文献

『Situational Functional Japanese』 凡人社

『日本語 口頭発表と討論の技術』 東海大学出版

『ACTFL-OPI マニュアル』 (1999年改訂版) ACTFL

牧野成一監修 (1995) 『ACTFL-OPI 試験管養成用マニュアル』

山内博之 (2005) 『OPI の考え方に基づいた日本語教授法』 ひつじ書房

野田尚史編 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 くろしお出版

西頭由紀子・疋田美伸 (1999) 「会話初級クラスにおけるコミュニケーションストラテジーの指導—SFJ の会話ストラテジー分析を通して—」 『九州大学留学生センター紀要10号』

権藤早千葉・花田敦子・井料洋美・占部匡美 (2005) 「中級レベル学習者への実践的な会話教育」 『教育現場からの日本語教育実践研究フォーラム 予稿集』 日本語教育学会2004年度研究集会第5回

花田敦子・権藤早千葉 (2005) 「中級入門会話教材作成と2004年度前期実践報告—フォーラム発表も合わせて—」 『久留米大学外国語研究所紀要12号』